Annihilation
of
Sweet Knights

Annihilation of Sweet Knights(サンプル版)

霜月ナル
シモツキ製作所

表紙・挿絵　霜月ナル

目次

プロローグ　7

プロローグ

異世界ロア。

地球とは別の次元に存在する魔法技術が発達した世界。この世界では、ロアを治めるトランシルヴェール王国とそれを打倒しようとする魔導シンジケート『ゼーロウ』が戦いを繰り広げている。

多数の魔物を操り数の力で迫るゼーロウに対して、トランシルヴェール王国はクイーングロリアによって力を授けられた美しき魔法戦士の部隊『女神近衛団』で対抗していた。

女神近衛団と聖涙石の力によって守られているトランシルヴェール王国王都へ侵略する事は、数多くの魔導師や魔物を保有するゼーロウでも難しく、また女神近衛団も各地に分散したゼーロウを壊滅させる事は出来なかった。戦いは拮抗状態となり、数年経った現在も続いている。

――しかし、その状況を変えるある事件が起きてしまった。

女神近衛団最強と呼ばれていた第一騎士団隊長『フェリセス』の敗北と捕縛。

それが悲劇の始まりになるとは、トランシルヴェール王国の人々は知る由もなかった……。

――

ロアの何処かにあるゼーロウ本部。

その地下深くにある、研究施設の一室。そこにはスーパーコンピュータや化学実験用の機材、薬剤が所狭しと置いてあり、魔法技術が進んだロアとは思えない場違いな光景が広がっていた。

ここはゼーロウの大幹部で創設者の一人でもある「ディモン」が新設した科学部門の施設で、強力な魔法を操る女神近衛団を撃ち倒す戦力を作り出す為に地上世界――地球から優秀な生物学者や技術者をスカウトし、研究を行っている。

この科学部門の研究は一定の成果を生み、遺伝子改造したクローン下魔の生産技術が誕生。そして、大量のクローン下魔による飽和攻撃を行いフェリセスを消耗させ、捕縛に至ったのだった……。

この作戦によるデータを元に、魔法戦士を全て倒し王都を陥落させるために必要な戦力を計算。その結果、大量のクローン下魔がさらに必要だと判明。

大量生産するには素材だけでなく、製造後の保管場所や餌も必要になってしまう。クローン下魔を1体製造する素材の数は多くないが、それが数千数万と膨大な数を生産/維持するには天文学的な量の資材が必要だ。

この問題を解決する為には個々のクローン下魔の能力を高め、魔法戦士の攻撃に耐性のある下魔を生み出す必要があった。

――そして、優秀な科学部門のスタッフ達はすぐにその解決方法を発見。それを実証する実験を行うために、捕縛したフェリセスを連行し、拘束台に固定していた。

「――さて、今の気分はどうかな？フェリセス」

「レディを寝かせるにはこのベッドは硬過ぎね……ゼーロウの大幹部様は女性の扱いが苦手なのかしら？」

フェリセスは拘束された彼女を舐めるように見るドミノマスクを着けた男――ディモンをキッと睨み付けた。体中に傷を負い、鉄の拘束台に大の字で縛り付けられた状況でも動じず、誇り高き女神近衛団の心を失っていなかった。

「この状況で悪態をつく余裕があるとは、流石は女神近衛団の第一騎士団隊長といったところか」

「私を舐めないで！たとえどんな拷問を受けようとあなた達に屈することは無いわ！」

「拷問？……ふむ、君は何か勘違いしているようだ」

「なんですって――？」

ディモンが後ろに控えている眼鏡をかけた白衣の男に目配せすると、男はフェリセスに近づき、ギョロッとした目を向ける。

彼は地上世界では異端の科学者で、様々な生物のキメラを想像したり、人体の遺伝子改造を研究していた。当然、倫理観の無い研究が問題で学会から追放。さらには警察からも追われる身になってしまった。そんな時、遺伝子改造に目を付けていたディモンと出会い、ゼーロウにスカウトされたのだ。

そんな彼が、まともな事を考えているわけも無く。

「フェリセスさん、端的にお話しすると……アナタには魔法戦士の力に抗体を持つ下魔を生み出すための母体になっていただきます」

「――は？」

男が言っている内容を理解できず、思わずフェリセスは呆けた声を出してしまう。

あまりにも悍ましい計画を呆気からんと語ることも恐ろしかったが、そもそも女神近衛団の魔法戦士が下魔の子を孕むなどあり得なかったからだ。

女神近衛団は美しい女性のみで構成されている関係上、敵に囚われてしまった時、その身体を穢されてしまう可能性が高い。そのため、魔法戦士の力を与えられた際に望まぬ妊娠や病気を防ぐための術式も身体に刻まれる。この術式は魔法戦士に変身していなくても

効果を発揮する優れものだ。
その上、人間と下魔では種族が違う。妊娠する確率は限りなく低い。
フェリセスは目の前の研究者がソレを知らない無知な男だと鼻で笑おうとするが、その反応を予期していたに研究者はさらに説明を続ける。
「――ああ、魔法戦士の避妊術式の事なら、アナタが気絶している間に解除済みですよ？そしてこれからアナタのお相手をしてもらう下魔は特別製です。ヒトでも繁殖できるように遺伝子改造を施してあります」
「なっ……何を言って……」
地上世界の技術には疎いフェリセスは、研究者が話す内容を全て理解できなかったが、これから自分の身に起こる事態は理解できてしまった。
――あの、悍ましい化け物の子供を孕み産んでしまう。
それは、どんな拷問よりも耐えられない辱めだ。
引きつった表情を浮かべ、顔を青ざめるフェリセスをよそに、研究者はさらに説明を続ける。
「さらにアナタの下腹部、そうちょうど子宮の上に魔術研究部門が開発した繁殖用の特殊淫紋を刻ませてもらいました。これには排卵誘発・成長促進、そして出産後にすぐまた孕めるように子宮を妊娠前の状態まで回復させる効果があります。まぁ、もちろん有限では

ありますが」

「――遺伝子改良によって、ある程度強力な下魔を作り出すことが出来ましたが、まだまだ女神近衛団を壊滅させるには不十分です。そこで魔法戦士と改良型下魔を交配させることで、魔法戦士の力に抵抗力を持つ下魔が生まれると考えたのです」

「そして――現状、最強の魔法戦士である貴女を母胎とする事にしました」

説明が終わった瞬間、フェリセスに刻まれていた淫紋が妖しく輝き、彼女の体が仄かに熱くなる。ソレに呼応するように子宮が疼き、息が荒くなる。

自分の体の変化で研究者の言っていることが嘘ではないと感じたフェリセスは、拘束を解こうと血相を変えて四肢を動かす。

「い、いやよっ！下魔の仔なんて産みたくないっ！」

「無駄ですよ、その拘束具はこの世界と地球の技術で造りあげた超合金製です。例え魔法戦士でも破壊できません。――さて、貴女の番となる改良型下魔のご登場ですよ」

研究者が懐から取り出した端末を操作すると、傍らにあったポッドがゆっくりと開く。

溶液が溢れ出し、床に広がる。ぷしゅうとケーブルらしきモノが飛び跳ねると中から通常の下魔よりも濃い紫の体色の下魔が現れた。

繁殖のために興奮剤を投与しているのか、既に興奮しており、股間のモノも大きくそそり立っている。

その大きさはフェリセスの腕よりも太く長い。
「そんなの入るわけ……し、死んじゃうわよ!?」
「まぁ少々想定外に大きくなってしまいましたが、魔法戦士の耐久力と繁殖用淫紋、各種装置で最低限貴女の生命は保ちます。ご安心ください」
「そういう問題じゃ……ひぃ!?」
いつの間にか、フェリセスの開かれた股の間に興奮した下魔が立っていた。息を荒げた下魔は長い舌でフェリセスの体中を舐め回し、彼女の全身をよだれ塗れにしてしまう。
さらに下魔は舌を器用に動かして彼女の上着を開かせ、豊満な胸を露わにすると両手で胸を鷲づかみにして乱暴に揉み、乳首を舌で舐め回す。
「んひぃ!?やめろぉ、揉むな舐めるなぁ！」
淫紋の効果か、敏感になっていたフェリセスは胸への責めに感じてしまう。ざらついた下魔の下が乳首を刺激する度に、フェリセスの体が震え、嬌声が響く。
それでも彼女はこれ以上声を上げないように食いしばろうとするが、その強情な姿勢が下魔の嗜虐心をそそってしまった。
下魔は顔を彼女の胸に近づけると片方の乳首に噛みついた。
「あひぃぃぃぃ!?ち、乳首コリコリ噛まないでぇ！――ダメダメダメダメダメぇぇぇ!?イクぅぅ！」

乳首への強い刺激に我慢できず、嬌声を上げ股間から潮を噴いてしまう。数秒間体が震えたあと脱力し、こんな無様な醜態を下魔に晒してしまった羞恥に顔を赤らめる。

フェリセスは生娘というわけではないが、倒すべき敵、しかも普段は歯牙にもかけない下魔に絶頂させられてしまったのだ。そのショックは計り知れない。

――同時に、股間部に刻まれた淫紋が再び光る。それに呼応するように下魔は息を荒くしてそそり立った巨根をフェリセスの秘所に押し当てる。

「い、いやぁ!?」

彼女は逃れようとするが、絶頂したばかりの体は上手く動かず、先ほどよりもその動きは弱々しかった。

「ゲェェェェェ！」

「はぁはぁ……や、やめてっ！そんなモノ入れられたら私、こわれ――ひぎぃぃぃぃぃぃ!?」

下魔の改造された巨根がフェリセスの秘所を容赦なく貫き、すぐに子宮の奥へと突き当たる。それでも巨根の半分は入りきっておらず、下魔はさらに腰を勢いよく突き上げる。

「おごぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!?」

巨根が全て子宮に入りきると、彼女の下腹部に巨根の形がくっきりと浮かび上がっていた。子宮には伸縮性があるとはいえ、まだ子供を孕んだ事の無い彼女の子宮にはあまりに

も惨い仕打ちだった。フェリセスが魔法戦士でなければ、死んでいてもおかしくないほどだ。

そんな彼女の悲鳴を無視して、無慈悲にも下魔は腰を前後に動かし始める。下魔が腰を引くと巨根のカリが子宮口に引っかかり、子宮が引きずり出されそうになってしまう。

本来なら激痛で失神するはずだが、繁殖用淫紋が痛みを軽減し快楽に変換。巨根が動く度に苦痛と快楽がごちゃ混ぜになり、フェリセスを責める。

「んぎぃ！ご、ごわれるぅ!?げまなんかにわだじ、ごわされちゃうぅぅぅぅ!?」

あまりの激しさに濁った悲鳴を上げてしまう。淫紋の力が増幅され、だんだんと苦痛は和らぎ、快楽だけがフェリセスの体を駆け巡り始めた。

下魔の巨根が前後に1ストロークする度、潮を噴き、ビクンビクンと体を震わせ嬌声を上げてしまう。もはや羞恥を感じる余裕すら無くなり、泣き叫ぶ事しか出来ない。

やがて、下魔の動きのボルテージが最高潮に達していく。実験室にドチュン！ドチュン！と下魔の巨根が子宮の奥を突き上げる音とフェリセスの言葉にならない嬌声が響きわたる。

無様な彼女の姿に興奮した下魔の巨根はさらにガチガチに膨れ上がり、フェリセスの子宮をさらに蹂躙する。

「おごぉっ!?さける!?じぎゅう、ざけちゃうううぅぅぅぅ!?もう、ぬいでっ！これ以上はむりだから、もうぬいでぇぇぇぇぇっ！」

下魔に懇願するフェリセスの姿はあまりにも無様だった。女神近衛団の気高き戦士の姿はもはや無く、けだものに犯し壊されていく惨めな女に成り下がってしまっていた。

もしここに彼女の部下達がいたら、間違いなく蔑んだ目でフェリセスを見つめていただろう。それほどの醜態だった。

本来、この下魔の役目は彼女の子宮内に射精し子を孕ます事なのだが、遺伝子改造されたせいか通常の個体よりも嗜虐性が高まっており、あえて射精を抑えてフェリセスが泣き叫ぶのを楽しんでいた。

研究者達はそれに気付いていたが、魔法戦士がどれだけの責めに耐えられるかのテストを出来る良い機会だと、あえてそのままにしていた。しかも、ゼーロウの構成員達への福利厚生として配布するために、この状況を録画している。もちろん、研究資料とするのが第一目的ではあるのだが。

「いやぁぁぁぁぁ！もう、はやぐだしでぇぇぇぇぇっ！ごのままじゃ、わだし、しんじゃうぅぅぅぅ！ごわれちゃうからぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

絶頂しすぎて追い詰められたフェリセスは、射精される事で訪れる最悪な未来を忘れて中出しを懇願する。射精してもうこの責めを終わらしてほしい、その一心だった。

だが、下魔はニヤリと嗤うだけで射精せずに腰を振り続ける。

「なんでぇぇぇぇ!?なんで、射精しないのぉぉぉぉ!?おねがいだから、もうおわらしてぇ

えええええええ！――おほぉぉぉぉぉぉぉ!?」

泣き叫び、再び懇願しても下魔は責めるのをやめない。只々ひたすらに腰を力強く振って、子宮の奥を叩く。その度にフェリセスの汚い悲鳴が響く。

下魔はさらに両手で彼女の胸を掴むと、鋭い爪で先ほどよりも勃起した乳首を千切れない程度に強く抓る。するとまたビクンビクン！とフェリセスの体が跳ね上がり、面白くなった下魔は何度も乳首を抓る。

「んひぃぃぃぃぃぃぃ!?ちくびちぎれりゅぅぅぅぅぅぅ!?」

通常なら快楽よりも痛みの方が強いはずの責めでも、淫紋の効果で快楽に変換されていく。泣き叫ぶフェリセスの顔は涙と涎でグチャグチャになり、白目を剥いた無様な有様だった。

その様子を見ながら、別室でモニターしている研究者達は淡々と記録を取っていく。

『ふぅむ、あの下魔の爪で抓ってもちょっとした切り傷で済む程度とは……魔法戦士の強化された肉体は本当に強靭ですね』

『そもそもあんなデカチンポ突っ込まれて、滅茶苦茶にされたら常人ならとっくに死んでるしな。淫紋の子宮保護や生命維持装置が効いているのもあると思うが』

普通の男なら美女が犯されている姿を見ればそれをオカズに自慰を始めるだろうが、彼らは研究に身を捧げた者たち。素晴らしい研究成果が生まれた時に至上の喜びを感じる別

ベクトルの変態達なのだ。
『おっ！そろそろ射精するようだぞ！淫紋モニターで受精するか確認しとけ！』
研究者の言うとおり、下魔はついにフェリセスにトドメを刺すべく、ラストスパートをかけていた。まるでピストンマシンのように、無慈悲で機械的な高速突き。もはやフェリセスも只々言葉にならない叫びを上げる事しかできなくなっていた。
「おぉっ！おほぉぉぉぉぉぉぉぉ！んぎぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！」
「ゲゲゲー！」
彼女の無様な悲鳴を楽しみながら、下魔は一際大きく腰を引くと一気に力強く腰を突き出した。そして、次の瞬間――。
ドピュルルルルルルルル――！
「んひょぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっぉぉおぉぉぉ!?」
凄まじい勢いで下魔の巨根から大量のザーメンが放出された。フェリセスの子宮内はあっという間にザーメンでいっぱいになり、子宮が風船のように膨らんでいく。
「あぁぁぁぁぁあぁぁぁ、射精止まらないぃぃぃぃ!?までてるぅぅぅぅぅぅ！」
少しでも受精確率を高めるため、繁殖用下魔の射精量は通常の百倍以上に増量されており、精液1滴に含まれる精子の量も恐ろしく多くなっている。
そんな特濃ザーメンをたっぷり5分以上も射精した後、ようやく下魔は巨根をフェリセ

スの子宮から引き抜いた。巨根という栓が抜けたために、大量に出されたザーメンが滝のように子宮からあふれ出てくる。ある程度、ザーメンが吐き出された事で膨らんでいた子宮が元に戻っていく。

「はひぃ……はぁ……ようやく、おわった……の？」

激しい凌辱からようやく解放され、息を整えるフェリセス。

自分の子宮から流れ出てくる大量のザーメンを見て、吐きそうになるがそれをグッと我慢したところで何かを忘れている事に気がついた。

――そもそも、何故下魔が彼女を犯していたのか？

それを思い出した途端、下腹部に刻まれた淫紋が強く輝いた。

「あ……あぁ……嘘、そんな……あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

只でさえ悪い顔色をさらに青ざめさせ、絶叫する。何が起きたのか、理解したくないのに理解してしまう。

子宮からドクンドクン！とナニかが育っていく鼓動が響く。そして、瞬く間に腹がまた膨らんでいく……。先ほど大量のザーメンを出されて膨らんだのとはレベルが違う。

これは――。

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！こんなの……こんなの、嘘よぉぉぉぉぉ!?私が……下魔の子を孕んだなんてぇっ！」

フェリセスはこの残酷な現実を否定しようとするが、どんどん大きくなっていく腹と胎内で蠢く存在がこれは幻ではない事を突きつける。しかも魔法戦士としての鋭い感覚のせいか、胎内にいる子が一匹だけではないのがわかってしまった。

そして腹が臨月の状態まで膨らむと、ついに陣痛が始まる。

「んぐひぃぃぃ!?――ひぃ――ひぃ――嫌っ、産みたくない産みたくない産みたくない産みたくない……」

陣痛で苦しみながら、念仏のように産みたくないとつぶやき続ける。人間相手ならともかく、悍ましい下魔の子を産み落とすのはどんな拷問よりも辛い。

「ひぃ――ひぃ――んほぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!?」

突然、フェリセスの体がビクンビクンと震えて潮を噴き出した。淫紋の効果で陣痛が快楽に変換されたのだ。陣痛の痛みは人によって差異はあるものの、その痛みは凄まじいもの。それが快楽にされたのなら……。

「おほぉぉぉ――あひぃぃぃぃ――イグゥゥゥゥゥ!?」

フェリセスは拘束された体をジタバタと動かし、何度も絶頂する。目は白目を剥き、舌をだらしなく垂らして泡を吹き始めた。出産が進むにつれて快楽の強さも高まり、絶頂が止まらなくなる。

そしてついに――下魔の子の頭が子宮から現れた。

「んひぃいいいいいぃいいぃいぃいぃいぃ!?あ、あ、あああぁぁぁあああぁあぁあぁぁ！いやぁぁぁぁぁあぁぁぁぁぁぁぁあ！」

一際大きく彼女が叫ぶと、にゅるりと下魔の子供が二匹同時に生まれ落ちた。体色は通常の下魔よりも濃く、明らかに通常の個体とは違う雰囲気を纏っているのが赤子の状態でも解る。

下魔の子を二匹産んで一息つくフェリセスだったが、すぐにまた特大の快楽が彼女を襲う。――まだまだ胎内には下魔の子達が産まれるのを待っているのだ。

「ふぎぃいぃいぃいぃいぃ!?もう産みたくない！産みたくないのぉぉぉぉぉぉぉ！」

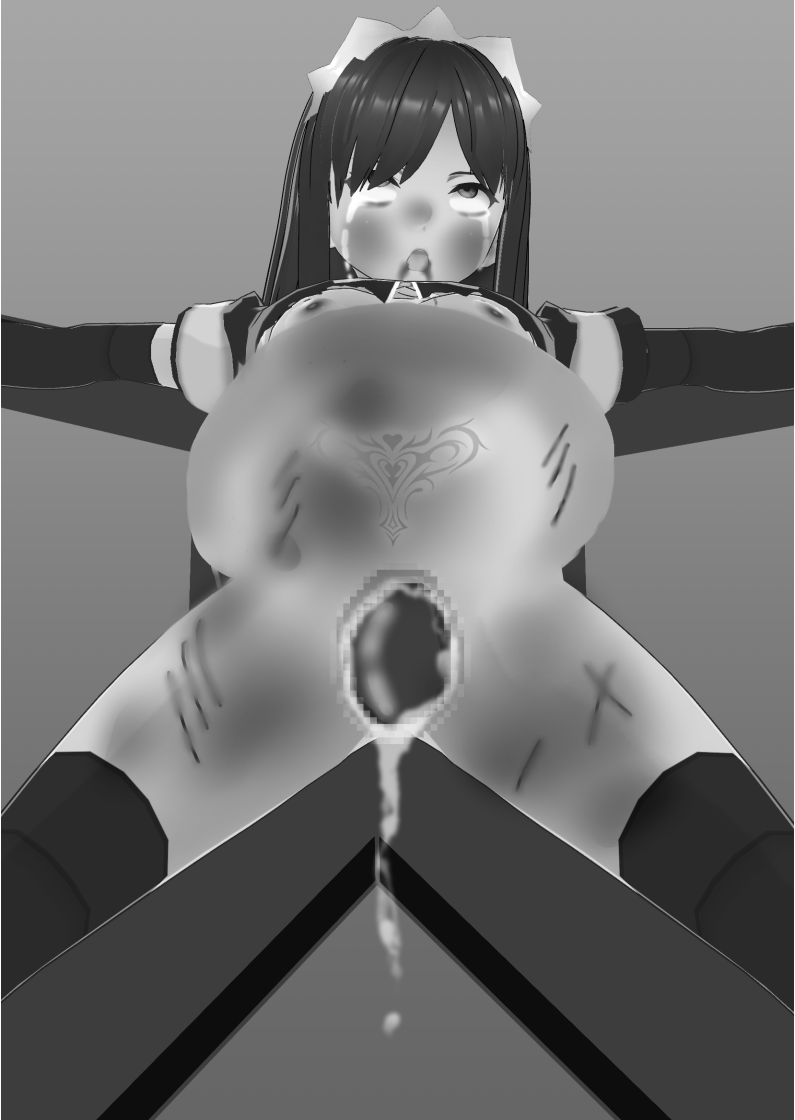
胎内の子ども達が外を出ようと藻掻く度に尋常ではないレベルの快楽が襲い、連続で絶頂する。ひぃひぃと襲い来る快楽に翻弄されていると――。

「きゃひぃぃ!?にゃ、にゃにが――」

絶頂でまともに動かない体を動かして胸を見ると、そこには先ほど生まれた下魔の子達がフェリセスの乳首に噛みついて母乳を吸っていたのだ。生まれたばかりとは思えないほどの噛みつきと吸引力で母乳を吸い上げられ、出産とは違う快楽が痺れるように広がり、フェリセスがまた絶頂してしまう。

体の中と外から責め立てられ、もはや何も考えられないほどに絶頂し続けるうちに、いつの間にか新たな下魔の子どもが生まれ出ていた。そしてすぐにまた、胎内に残っている

子どもが這い出てくる。
――数十分後、ようやく全ての子を出産し終えた。その数、なんと20匹。あまりの出産地獄にフェリセスは気を失っていた。
「あ……え……おぇ……」
連続出産を終えて脱力した彼女の秘所から、だらしなく膣が体外に露出してしまっていた。先っぽも広がってしまい、もはや二度と子を産めないのではないかと思ってしまうほどだ。
しかし、淫紋が輝くと胎盤がずるりと排出され、ゆっくりと子宮の状態が子を孕む前の状態に戻っていく。気絶しているフェリセスはその感覚でピクッピクッと震えているが目を覚まさない。あっという間に彼女の子宮はまた子を孕める状態へと元通り。
――つまり、彼女の絶望はまだ始まったばかりという事だ。
「――――んほぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!?」
気絶していた彼女の子宮に再び巨根が勢いよく突っ込まれた。その衝撃で一気に覚醒したフェリセスは絶頂しながら、自分の運命を悟ってしまう。
無理矢理生かされ続け、母胎として使い物にならなくなるその時まで休む間もなく下魔の子を産み続ける――そんな運命を。
「いやぁぁぁぁあぁぁあああぁぁぁあぁぁぁぁぁぁぁ！」



「おぉ……！これは凄い！今までの結果よりも高い数値が出たぞ！やはり彼女を母体にしたのは間違っていなかった！」

研究室でフェリセスが産んだ下魔の遺伝子解析結果を見て興奮する声が響く。

フェリセスの最初の出産から数日が経ち、彼女が産み落とした下魔の数は百を優に超えている。

彼女の精神は初日で既に壊れ、泣き叫ぶことも無くなりもはや只々無感情に下魔を産み落とすだけの母胎になっていた。最初に彼女を孕ませた下魔だけでなく、自身が産んだ下魔にも孕まされている。血が濃くなるので本来あまり良くないのだが、より魔法戦士の因子を取り込んで耐性を強めるという目的には沿うので研究者達はそのままにしていた。

結果、優れたバランスの個体が生まれたのだった。この個体は理論上、魔法戦士の魔力を完全に弾くことも吸収することすらも可能な魔法戦士特攻の下魔なのだ。

この特攻下魔を元にクローン製造だけでなく、遺伝子改変したパワータイプなどのバリエーションも製造可能になる。

問題はあくまで現状では理論上の話であり、実戦でデータを取らないといけないという事だ。適当な女神近衛団の騎士団にぶつけてみても良いが、ある程度上位の実力と魔力を持つ戦士である方が良い。しかし、それほどの実力を持つ者は王都の守護に就いている事

が多く、簡単に襲撃する事は出来ない。フェリセスを捕らえられたのは彼女が演習で王都から離れていたからだ。
「う～ん……どうしたものだろうか？ちょうど良い魔法戦士はいないですかね、ディモンさん」
「――ふむ、それならちょうどいいのがいるな」
「地上世界を守る女神近衛団の第13騎士団スイートナイツ、なんてのはどうだ？」

――

日本国内某所にある私立国際教導学園。
１つの都市と同じくらいの規模を持つ学園都市とも言えるその場所では、近頃異形の化け物『魔物』の出現する事件が多発していた。教導学園がある土地は所謂地脈の力が溜まる場所で、異世界からのゲートが開きやすい。そのためゼーロウはこの土地を起点とし、マナや物資を得るために魔物を派兵していたのだ。
しかし、クイーングロリアから力を分け与えられた魔法戦士スイートナイツと呼ばれる正義のヒロイン達によって魔物は討伐され、ゼーロウの侵攻から人々は守られていた。

当初はスイートルージュという一人の戦士だけしかいなかったが、ゼーロウの活動が活発化したことにより、素養のある学園の生徒から新たに戦士が選ばれた。スイートリップこと七瀬凛々子、スイートキッスこと柚木香那葉。彼女達は魔法戦士としての使命を受け入れ、人々を守るために日夜戦い続けていた。

そんなある日のこと。

学園の授業が終わり、凛々子は香那葉が働く喫茶店で紅茶を飲んでいた。傍らには香那葉も座っている。

「――ふぅ。最近はゼーロウの活動が収まっていて助かるわ……テスト期間中は勉強に集中したかったし」

「そうですね、先輩。このまま現れなければいいんですけど……」

「うーん、それはないでしょうね。……もしかしたら、何かを起こすために準備しているのかもしれないわ。気を引き締めていきましょ、香那葉ちゃん」

「はいっ凛々子先輩！」

その後、しばらくの間二人は談笑し日が暮れ始めた頃に喫茶店を後にした。

部活動に入っている学生は練習や制作活動に精を出し、帰宅部や部活が休みの学生は繁華街へと繰り出しテスト明けの開放感を楽しんでいるため、寮への帰り道は人が少なかった。

「――それにしても、香那葉ちゃんの特製ケーキおいしかったな～」
「そんな、まだまだお店に出せる程のものじゃ……」
「そんなことないわ！もうプロレベルだと断言でき――」
「……？どうしたんですか、凛々子先輩？」
「あなた、何者!?」
　明日からの予定や喫茶店で食べた香那葉特製のケーキについて感想を話し合っていた凛々子達の目の前に、いつの間にか黒衣の男が現れていた。明らかに学生では無い背格好、怪しいドミノマスクを付けている。そして常人にはありえない、魔力をその身から漂わせていた。
　凛々子はこの男が、ゼーロウの構成員だとすぐに気がついた。それもかなり上位の幹部クラスだとも。それだけ男から感じるプレッシャーは凄まじかった。自分と香那葉が二人で戦っても勝てないと理解した凛々子は、香那葉を庇うように背中に隠し、男を睨み付ける。
「私の名は『ディモン』。ゼーロウの幹部なんてものをやらせてもらっているが、『私は』君たちと今戦う気は無いぞ？」
「――なんですって？」
「……ふむ、どうやら私との力量差を正しく理解しているようだ。地上世界の魔法戦士に

しては才能があるな。これなら戦闘力のデータ収集には使えそうだ」
　ディモンの値踏みをするような視線に、凛々子は不快感を露わにする。出来ることなら早く魔法戦士へと変身してこの男を打ち倒したいが、一見すると無防備に立っているだけのはずのディモンには隙が一切見当たらず、変身することが出来ない。そもそも、変身してもディモンには勝てないと本能が叫んでいる。
「ゼーロウの幹部が何故こんな所に……？」
「それは……おっと、始まったようだ」
「なにを言って――なっ!?」
　突如、凛々子達が歩いてきた方角――繁華街の方から僕発音が響いた。背後へと振り返るとビルの隙間から煙が立ち上っており、幻聴ではなく実際に爆発が起きたことを示していた。それだけではない。さらに別の方向、広い公園がある方角からも人々の叫び声が聞こえてきたのだ。2カ所への同時襲撃。明らかにこれは彼女達を分断するための罠に違いなかった。
「さぁ、どうする？私は別に1カ所対処してもらって構わないが……その場合、片方の被害は大きくなってしまうだろうなぁ」
「くっ……ふざけないで！そもそもあなた達が「先輩！私なら大丈夫です」――香那葉ちゃん!?」

確かに香那葉は魔法戦士として幾度かの戦いを経験し、一人でも戦えるレベルにはなった。だが、明らかに通常の戦いとは違う状況。彼女一人では対処できない可能性が高い。しかし、片方ずつ対処しては被害が大きくなるのはディモンの言うとおりで、正義感の強い凛々子にはそんな事は許せなかった。

「ごめんなさい、香那葉ちゃん……公園の方を任せられる？早く合流できるように頑張るけど、無理はしないで危なくなったら逃げて」

「――はい！先輩も気をつけて！」

ディモンを警戒しながらも公園の方角へと走っていく香那葉を見送った後、凛々子も繁華街へと向かうのだった……。

「さて、有用な戦闘データがどれだけ取れるか……見物だな」

Annihilation
of
Sweet Knights

Annihilation of Sweet Knights(サンプル版)

2024年03月19日　初版

奥　付

発行　　シモツキ製作所
著者　　霜月ナル
URL　　https://twitter.com/HpinchL

イラスト霜月ナル

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
(https://sss.sylphid.jp/)